

山梨県韮崎市

北下条遺跡

— 1982（昭和57）年度埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1991

韮崎市教育委員会

山梨県韮崎市

北下条遺跡

— 1982（昭和57）年度埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1991

韮崎市教育委員会

序 文

本書は、蕪崎市藤井町北下条地内において、昭和57年度市都市計画街路北下条南下条線建設事業に伴い、発掘調査された北下条遺跡の報告であります。

蕪崎市は全国的にも有名な坂井遺跡に代表されるように、埋蔵文化財の宝庫として県内外に広く知られております。近年は県営圃場整備事業等の大規模開発及び市立北東小学校建設等の公共事業にともない数多くの遺跡が発掘調査され、貴重な文化財の発見が相次ぎ原始・古代史の解明に貢献しております。

北下条遺跡から発見された遺構は弥生時代の竪穴住居址、奈良・平安時代の竪穴住居址などで、採集された遺物は当時の人々が使用した生活用具である土器が主体となっています。これらの遺跡から得られた貴重な資料は我々の祖先の生活の営みを如実に物語るもので、歴史解明の鍵となるものと信じます。本報告書が地域史を解き明かし地域発展の一助となればと願うとともに、文化財として永く後世に伝えていくことを重大な責務と感じます。

北下条遺跡の発掘調査並びに整理作業・報告書作成に伴い、甚大なる御理解と御協力を賜った関係各諸機関並びに皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成3年5月31日

蕪崎市教育委員会

教育長 功 刀 幸 丸

例 言

- 1 本書は、市都市計画街路北下条南下条線建設事業に伴い1982（昭和57）年度に発掘調査された北下条遺跡の報告である。
- 2 発掘調査は、蕪崎市教育委員会が実施した。
- 3 整理作業及び本報告書の作成は、蕪崎市教育委員会が行った。
- 4 遺物・図面整理及び報告書作成にかかわる業務の参加・協力者（敬称略）
榎本勝・小田切玲子・土橋きよみ・堤直子・深沢真知子・石原ひろみ・小野初美・三井福江
- 5 凡 例
 - ① 挿図中のドットは焼土をあらわす。
 - ② 挿図断面図の  は石をあらわす。
 - ③ 縮尺は各挿図ごとに示した。
 - ④ 歴史時代土器断面、白めきは土師器、黒は須恵器をあらわす。
- 6 発掘調査及び報告書作成に当たり、多くの方々から御指導・御協力をいただいた。記して厚く御礼を申し上げる次第である。（敬称略）
末木健・坂本英夫・新津健・八巻与志夫・長沢宏昌・平野修・山路恭之助・深沢裕三・山秋泰・雨宮正樹
- 7 発掘調査・整理によって出土並びに作成された遺物及び資料は、蕪崎市教育委員会において保管している。

発掘調査組織

- 1 調査主体 蕪崎市教育委員会
- 2 調査担当 山下孝司（蕪崎市教育委員会社会教育課）
- 3 調査参加者
岡本嘉一・小田切福江・鈴木さく江・小沢高恵・小沢千代子・岡本保枝・長島昌子・小沢久江・志村冨子・小田切正子・五味ゆき子・乙黒きくえ・貝瀬辰子・小沢宮野
- 4 事務局 蕪崎市教育委員会社会教育課
昭和57年度 教育長 岩下俊男、課長 清水達弥、係長 真壁静夫、守屋喜治・中島保比古・樽林由紀子
平成3年度 教育長 功刀幸丸、課長 中島尚武、課長補佐 深谷卓、係長 深沢義文・横森淳彦、雨宮智子

目 次

序	文
例	言
目	次
挿 図 目 次	
写 真 図 版 目 次	

I	調査に至る経緯と概要	1
II	遺跡の立地と環境	1
	1 遺跡の立地	
	2 周辺の遺跡	
III	遺跡の地相概観	2
IV	遺構と遺物	2
V	ま と め	19

写 真 図 版

挿 図 目 次

第 1 図	北下条遺跡①と周辺の遺跡	3
第 2 図	遺跡全体図	3
第 3 図	1号住居址平・断面図	4
第 4 図	1号住居址カマド	4
第 5 図	1号住居址出土遺物	5
第 6 図	2号住居址平・断面図	6
第 7 図	2号住居址出土遺物	7
第 8 図	3号住居址平・断面図	8
第 9 図	3号住居址出土遺物	10
第 10 図	4号住居址カマド	10
第 11 図	4号住居址平・断面図	11
第 12 図	4号住居址出土遺物	12
第 13 図	5号住居址平・断面図 カマド	13
第 14 図	5号住居址出土遺物	14
第 15 図	6号住居址平・断面図	15
第 16 図	6号住居址出土遺物	15
第 17 図	7号住居址平面図	16
第 18 図	8号住居址平・断面図	16
第 19 図	8号住居址出土遺物	16
第 20 図	9号住居址平・断面図 カマド	17
第 21 図	9号住居址出土遺物	18
第 22 図	10号住居址平・断面図	18
第 23 図	遺構外出土遺物	18

写真図版目次

- 図版 1 遺跡遠景、遺跡近景
- 図版 2 1号住居址と出土遺物、2号住居址と出土遺物
- 図版 3 3号住居址と出土遺物、4号住居址と出土遺物
- 図版 4 5号住居址と出土遺物
- 図版 5 6号住居址と出土遺物、7号住居址、発掘風景
- 図版 6 8・9・10号住居址、8号住居址出土遺物、9号住居址出土遺物、遺構外出土遺物

I 調査に至る経緯と概要

市都市計画街路北下条南下条線建設事業実施にともない、当該事業実施場所が埋蔵文化財包蔵地であると県文化課から指摘を受けたが、昭和56年度分工事は既に着工されており急遽県文化課の指導により施工場所の調査を実施した。この調査は昭和57年3月24日・25日に行われ、道路掘削部分断面観察により平安時代の竪穴住居址1軒を確認した。平面での検出は工事により削平されてしまっており出来なかった。この結果をもとに昭和57年度施工部分に関して、蕪崎市教育委員会では蕪崎市から依頼を受け、事業予定地区を昭和57年11月12日・16日に試掘調査を行い遺跡の存在を確認した。都市計画街路の工期は既に決定されていたので、市と市教育委員会で協議を行い、早急に調査を実施することとなり、遺跡名を北下条遺跡とし、工事に先立って面積約700㎡を対象として発掘調査を行い、記録に留め永く後世に伝えることとした。

発掘調査は、昭和57年11月22日より開始し約1カ月間行い、遺物の洗浄・整理作業・報告書作成は平成3年度に行った。なお、3号住居址の遺構と遺物に関しては「北下条遺跡略報―簡描文を有する弥生土器―」として『丘陵』第12号（1986 4 甲斐丘陵考古学研究会）誌上に掲載報告した経過がある。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

北下条遺跡は山梨県蕪崎市藤井町北下条字殿田地内に所在した。遺跡台帳に載る北下条遺跡の南側に位置し、集落に隣接するため同名を遺跡名とした。

蕪崎市は、山梨県の北西部に位置し、甲府盆地の北西端を占めている。市内を貫流する釜無川・塩川により、地形的にはほぼ山地・台地・平地の三地域に分けられる。塩川右岸の氾濫原は、塩川の侵食によって造られた茅ヶ岳山麓の断崖と、七里岩台地東側の片山とに挟まれた低地性の平地となっている。この平地は通称藤井平と呼ばれ、地内を貫流する黒沢川・藤井堰により水利がよく、肥沃で豊かな水田地帯が広がっている。また、『甲斐国志』には「穴山ヨリ南小田川、駒井、坂井、中條、下條、蕪崎等ノ数村ヲ里人藤井ノ庄五千石ト云」と記載があり、古くから穀倉地帯であったことが窺える。当該地帯は一見平坦地の様相を呈してはいるが、地形を観察してみると、度重なる氾濫によって自然堤防状の微高地と低地が所々に発達していることがわかる。藤井平は、このような微高地上に遺跡が点在しており、北下条遺跡は標高約370mの水田下に発見された。

2 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代区分	備考
①	北下条	弥生・古墳・奈良・平安	昭和57年度 葦崎市教育委員会調査
②	坂井南	縄文・古墳・平安	昭和60年度 葦崎市教育委員会第3次調査
③	坂井	縄文～晩期	志村滝蔵『坂井』地方書院 昭和40年
④	宮ノ前	縄文・奈良・平安	昭和63年度～平成2年度 葦崎市遺跡調査会調査
⑤	後田	縄文・古墳・奈良・平安	昭和63年度 葦崎市教育委員会調査
⑥	北後田	縄文・奈良・平安	平成元年度 葦崎市教育委員会調査
⑦	宮ノ前第2	奈良・平安・中世	平成2年度 葦崎市教育委員会調査
⑧	堂の前	弥生・奈良・平安	昭和61年度 葦崎市教育委員会調査
⑨	下横屋	弥生・平安・中世	平成元年度 葦崎市教育委員会調査
⑩	北下条	弥生・平安	

Ⅲ 遺跡の地相概観

北下条遺跡は、市営北下条団地から東へ約250mの、東側に小沢が流れる微高地に所在した。遺跡の東側には沢を挟んで平成元年度に発掘調査された下横屋遺跡があり、西側は団地まで平坦な地形となっており水田が広がっている。北東側は北下条の集落が続き、南東側は相壘の集落、南方には南下条の村落が望める。調査区域内において土層を観察すると、上位から下位に耕作土・水田床土・褐色客土層・砂質暗黄褐色土の順に堆積がみられる。遺構は砂質暗褐色土層中に掘りこまれていた。

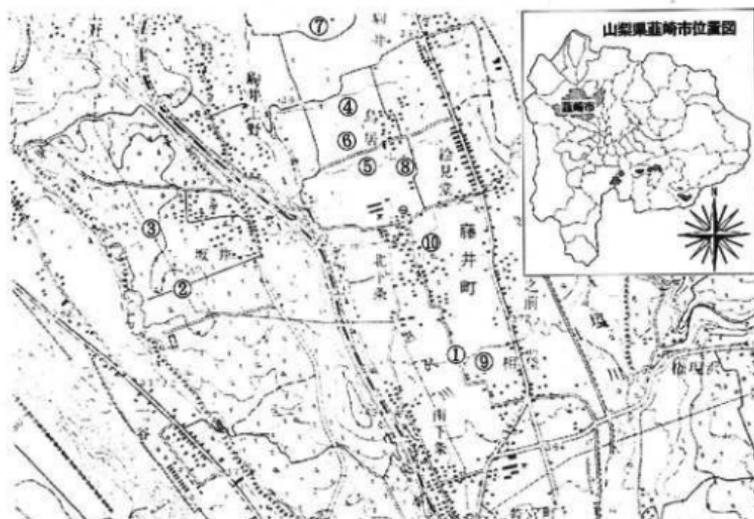
Ⅳ 遺構と遺物

調査の結果発見された遺構は、弥生時代の竪穴住居址1軒、奈良・平安時代の竪穴住居址9軒となっている。以下、調査現場において付けた遺構番号順に遺構と遺物についてみていこう。

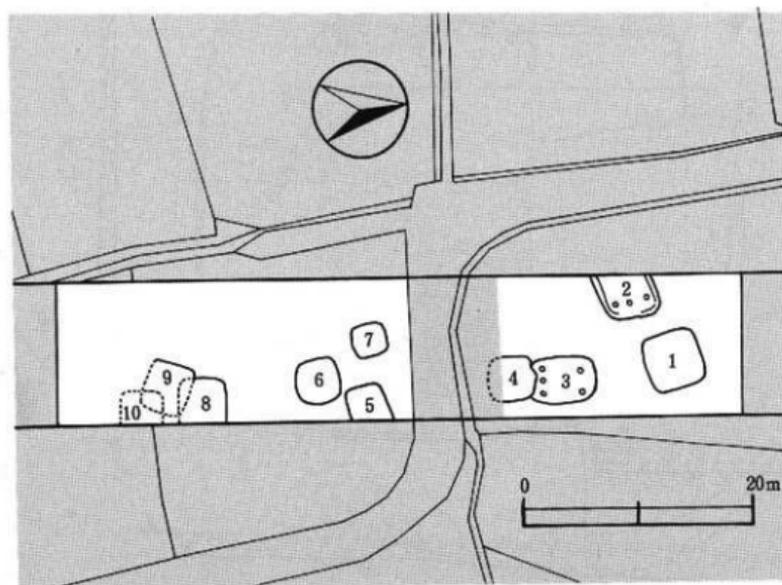
<1号住居址>

〔遺構〕(第3・4図)

調査区域北端に位置する。平面形は隅円長方形を呈する。南西側は試掘用立て坑により不鮮明

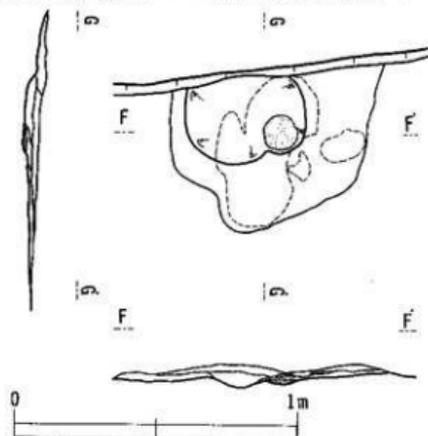


第1図 北下条遺跡①と周辺遺跡 (1:25,000)

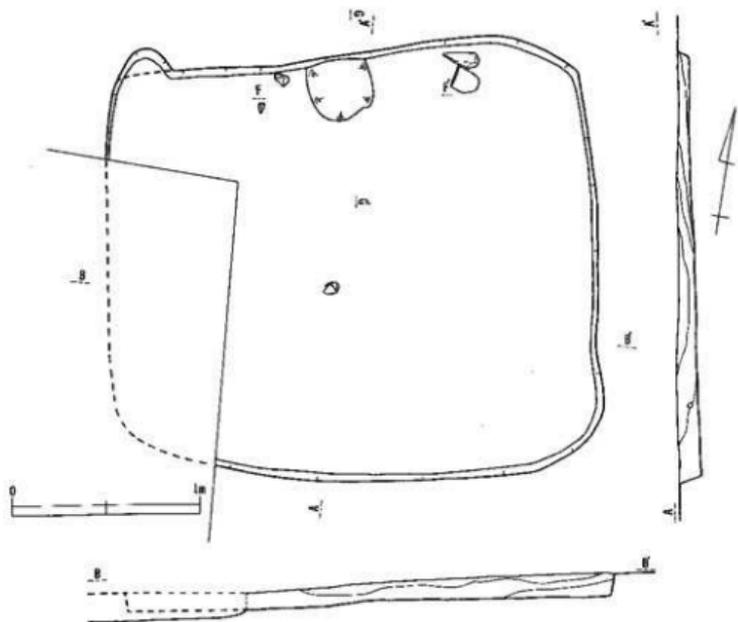


第2図 遺跡全体図 (1:500)

となっている（破線部分は壁の推定ライン）。規模は東西約5m、南北約4.7mを測る。壁はやや外傾しながら立ち上がる。壁高は10cm～25cm前後を測り、北側が浅くなっている。床面は中央部分がやや高い。柱穴・周溝は無い。カマドは北壁中央に構築されるが、遺存状態は悪かった。



第4図 1号住居址カマド (1/20)



第3図 1号住居址平・断面図 (1/60)

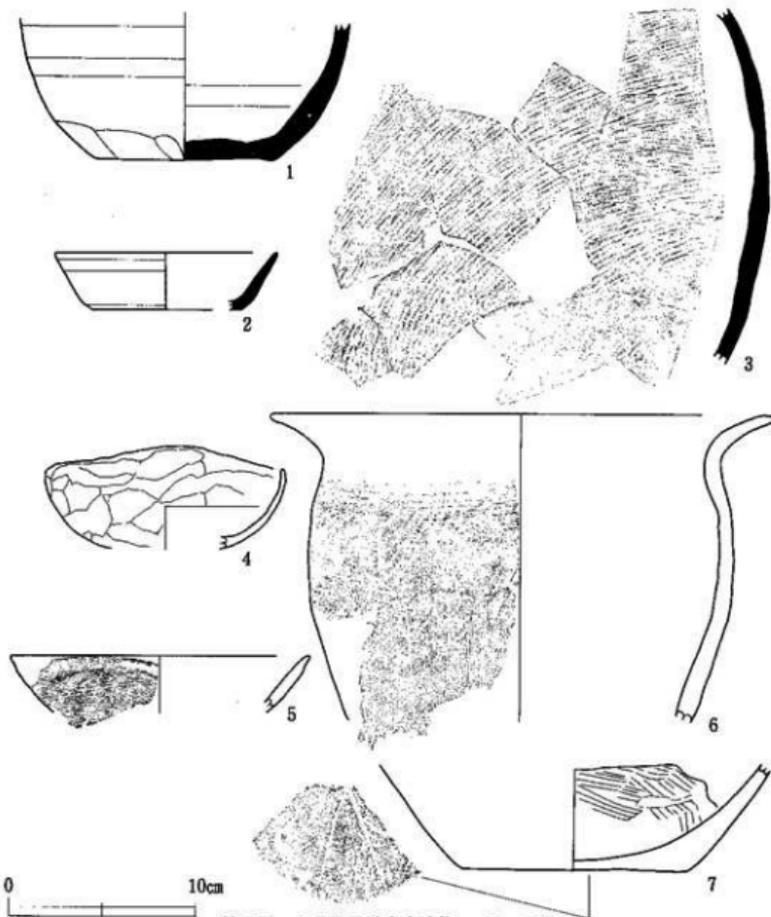
〔遺物〕(第5図)

遺物の出土は多くなく、破片ばかりであった。

出土遺物一覧

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	須恵器	甕	-	-	9.6	密白色粒子を含む 赤褐色	ロクロ水挽き 内面-みこみ部粘土が付けたしてある。 外面-胴下半へう割り痕 破片
2	須恵器	坏	3.1, 11.8,	7.8	粗い砂粒を含む	赤褐色	ロクロ水挽き 外面-胴部下半回転へう割り口縁部破片



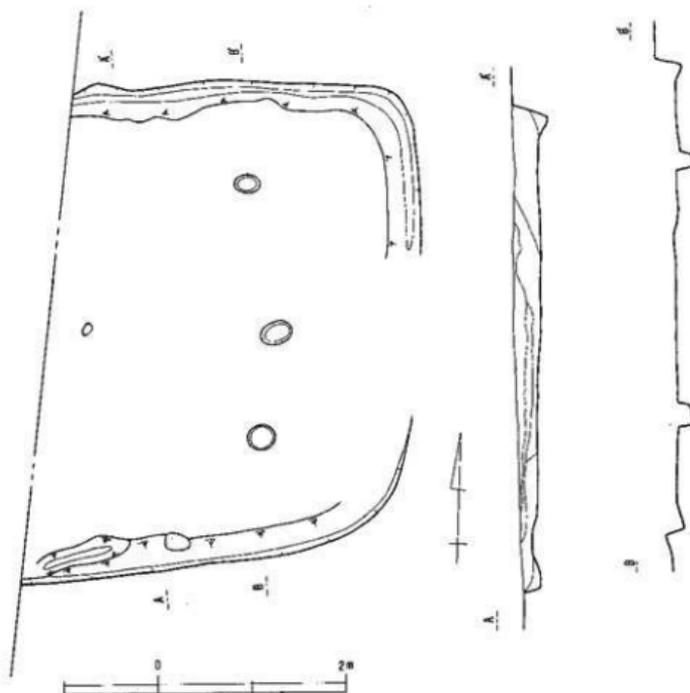
第5図 1号住居址出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法 量			胎 土	色調 (内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
3	須恵器	甕	-	-	-	黒色粒子 砂粒を含む	白灰色	内面-ヘラ削りあり 外面-叩目 破片
4	土師器	坏	-	12.5	-	赤色粒子 砂粒を含む	にぶい橙色 にぶい褐色	外面-器面全体にヘラ削りが施さ れている。 1/3残
5	土師器	坏	-	15.8	-	黒色粒子 砂粒を含む	明赤褐色	外面-刷毛目がみられる。 口縁部破片
6	土師器	甕	-	26.0	-	雲母 砂粒を含む	褐色	外面-胴部に刷毛目がみられる 口縁-胴部破片
7	土師器	甕	-	-	11.8	砂粒を含む	明赤褐色 にぶい赤褐色	内面-刷毛目痕がみられる 外面-磨滅により不鮮明 底部に木葉痕あり 底部破片

<2号住居址>

〔遺 構〕 (第6図)

調査区域北辺西側に位置する。南西側は試掘用立て坑により不鮮明となっている。西側は調査区域外で完掘できなかった。平面形は隅円方形であろう。規模は南北で約5mを測る。壁は外傾



第6図 2号住居址平・断面図 (1/60)

しながら立ち上がり、高さは10~30cm前後を測る。床面ほぼ平坦。床面からの深さ10cm前後の周溝がめぐる。床面東側に3個小穴が検出された。柱穴であろうか。カマドは発掘部分では確認されなかった。

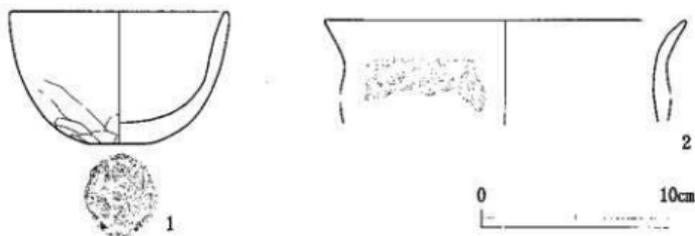
〔遺物〕(第7図)

遺物の出土は少ない。

出土遺物一覧

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
1	土師器	碗	7.1, 11.4,	3.2	砂粒を含む	黄灰色 にふい褐色 一部明赤褐色	器面は磨滅によりざらつき不鮮明 外面-胴下部にへら削りがみられる、 底部に木葉痕あり
2	土師器	甕	-	19.2,	赤色粒子 砂粒を含む	にふい橙色	外面-頸部に駢毛目 口縁部破片



第7図 2号住居址出土遺物 (1/3)

<3号住居址>

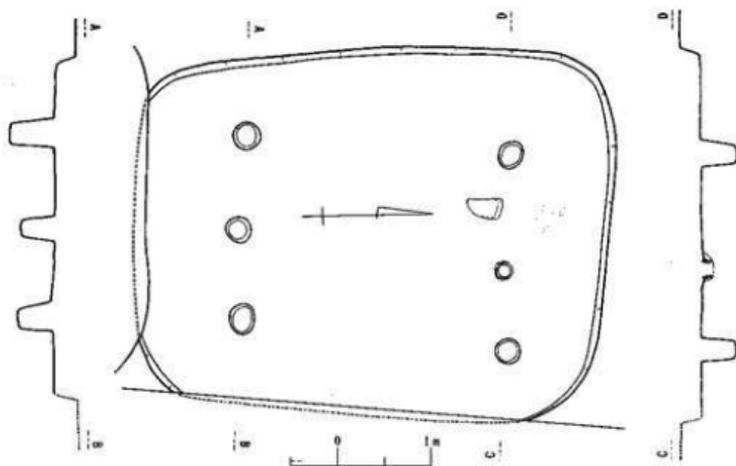
〔遺構〕(第8図)

調査区域北半部東側に位置する。掘土作業の際に若干の土器が出土したが、砂質暗褐色土中に掘り込まれており、本住居址の埋没土との区別がしにくく平面形の確認が困難であったので試みに溝状に掘り下げを行い床面を検出し、それを追いながら壁の立ち上がりを探した。平面形は隅円長方形を呈し、長軸の方向はほぼ南北となる。規模は南北5.2m、東西4m。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁は4号住居址に切られ遺存しておらず、東壁は工事により削られてしまった。床面は砂質暗褐色土を踏み固めた状態で、埋没土との区別は比較的容易であった。柱穴は住居内北側と南側に並んで5本が当り、床面からの深さは40cm前後を測る。炉は埋壺炉で、北側柱穴を結ぶ直線上にあり、頸部下半を欠く甕を逆位に埋設していた。炉の周囲にはやや窪んで焼土がみられた。炉内には焼土は明瞭にみられなかったが、北西方向にまかれたような形跡で焼土が散在していた。

〔遺物〕(第9図)

遺物の出土は良好でなく、少なかった。

- 1 口縁部破片。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。口縁部は横撫でされ、外面には櫛描波状文がみられる。

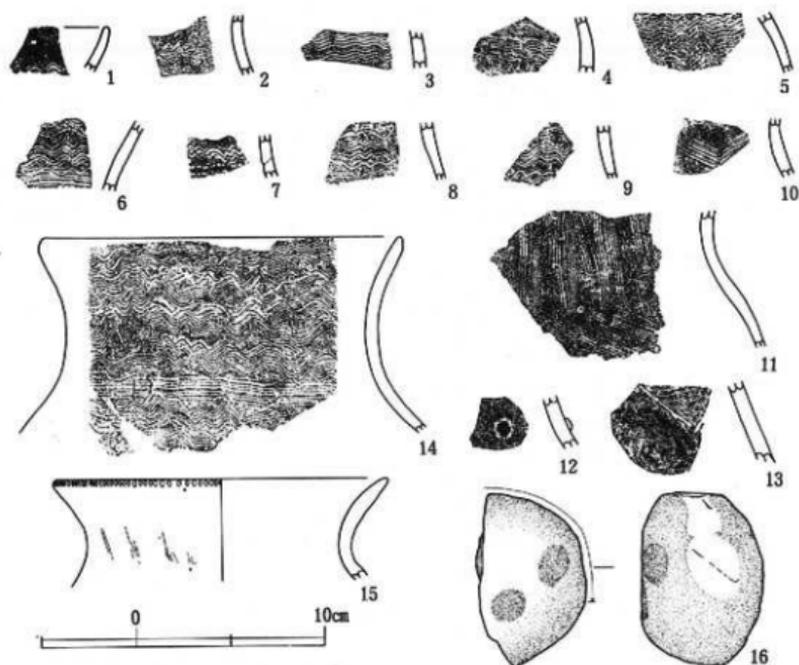


第8図 3号住居址平・断面図 (1/60)

- 2 頸部破片。色調は外面黒褐色、内面灰褐色を呈し、胎土には砂粒・若干の金雲母を含む。焼成は良好である。外面は6条の櫛描波状文が施される。内面は刷毛状工具による横方向の整形がみられる。
- 3 頸部から肩部付近にかけての破片と思われる。色調は外面暗褐色、内面黒褐色を呈す。胎土には砂粒・若干の金雲母を含む。焼成は良好である。外面は8条(?)の櫛描波状文が施される。内面は横方向の飽磨きが施され、一部に煤の付着が見られる。
- 4 胴部破片。色調は外面白褐色、内面黒褐色を呈し、胎土には砂粒・金雲母を含む。焼成は良好である。外面は6条の櫛描波状文が施される。内面は刷毛状工具による横方向の整形後粗い飽磨きを加えられている。
- 5 肩部破片。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。外面は7条の櫛描波状文が施される。内面は刷毛状工具による横方向の整形後、棒状工具により磨きを加えられている。
- 6 口縁部付近から頸部にかけての破片。色調は白褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。外面は頸部に櫛状工具による簾状文を施した後、そこから口縁部付近にかけて6条の波状文を施文している。内面は刷毛状工具による横方向の整形後、棒状工具により磨きを加えられている。
- 7 頸部破片。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・石英・若干の金雲母を混入する。焼成はやや軟弱である。外面は細い棒状工具によよ結節沈線(櫛齒状工具押し引き文)が施され、櫛描波状文が施される。内面は磨滅により整形は不明だが、輪積み痕がみられる。

- 8 頸部破片。色調は外面黄褐色、内面赤褐色を呈す。胎土には砂粒が混入される。焼成は良好である。外面は櫛状工具により籬状文を施した後、6条の波状文が施される。内面は刷毛状工具による横方向の整形後、棒状工具による磨きを加えられる。
- 9 頸部破片。色調は白褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。外面は6条の櫛描波状文、籬状文が施される。内面は棒状工具による磨きがみられる。
- 10 頸部破片。色調は外面黒色、内面灰褐色を呈す。胎土には砂粒・金雲母が含まれる。焼成は良好である。内、外面共に横方向の刷毛状工具による整形後、篋磨きされている。さらに外面には破片上部に櫛描波状文が施され、その下には7条の平行直折線文がみられる。
- 11 頸部から肩部にかけての破片。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・石英が混入される。焼成は良好である。外面は頸部に縦方向、肩部に斜め方向の刷毛目が施される。内面は横方向の刷毛状工具による整形後、磨きを加えられる。
- 12 頸部破片。色調は赤褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成はやや軟弱である。外面には縦方向の刷毛目と、円形貼付文が認められる。内面は磨滅・剝落により整形は不明。
- 13 頸部と思われる破片。色調は外面赤褐色、内面白褐色を呈す。胎土には砂粒・小石・若干の金雲母などが混入される。焼成は良好である。内面は磨滅しているため明瞭な整形痕はみられないが、刷毛整形後に篋磨きされていると思われる。外面には篋による平行斜線を満した三角形が施文され、器面を撫でにより密にし、三角形を除いて丹彩される。
- 14 甕形土器。頸部下半を欠損する。色調は白褐色を基調とし、口縁部から頸部にかけて黒褐色を呈する。胎土には砂粒を混入する。焼成は良好である。外面口縁部は横撫でされる。頸部には櫛状工具による7条の籬状文が右回りに施文され、その上下には6条の波状文が数帯巡っている。内面は棒状工具による横方向の磨きが丁寧に施されている。なお本土器は、埋甕炉として使用されていた。
- 15 甕形土器。頸部下半を欠損する。色調は白褐色を基調とし、内面口縁部、外面頸部の一部に二次焼成と思われる黒斑がみられる。胎土には砂粒・小石等を混入する。焼成は良好である。口縁部は内・外面共に横撫でされ、口唇部には刻目が巡る。外面頸部は刷毛状工具による縦方向の整形後、撫でが加えられている。内面は刷毛状工具による横方向の整形後、棒状工具による丁寧な磨きが施される。本土器は、排土作業中の出土品であり、その形態から、他の土器よりも後出的なものであろう。
- 16 石器。半分欠損しているようである。拳大の大きさで、片面に二カ所直径2cm程の浅い凹みが付けられている。片側には捺痕が観察できる。凹みは指をあてるためのものであり、握りやすくしたものであろうか。

ここに示した遺構及び遺物の説明は、「北下条遺跡略報―櫛描文を有する弥生土器―」『丘陵』第12号(1986.4)において報告したものの再録であるが、16は新たに資料として追加掲載したものである。

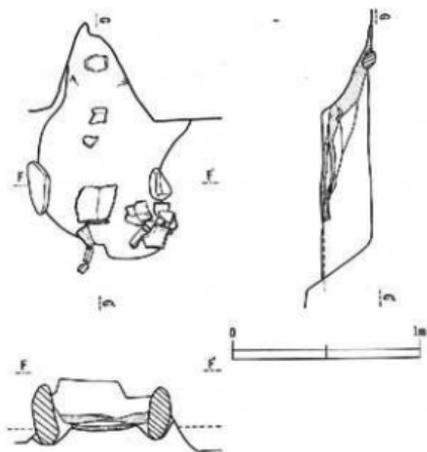


第9図 3号住居址出土遺物 (1/3)

<4号住居址>

〔遺構〕(第10・11図)

調査区域中央北側に位置する。北側は3号住居址を切って構築される。東側は工事、南半分は道路によって完掘できなかった(破線部分は推定ライン)。規模は遺存部分の東西で約4mを測る。平面形は隅円方形を呈すると思われるが、不詳である。埋没土は上層から大略暗褐色土と黒褐色土に分けられる。カマド周辺部においては床面が比較的良好に認められたが、壁穴内部にわたっては堅く踏み締めた部分が明瞭ではなく、また埋没土との区別がつきにくく掘

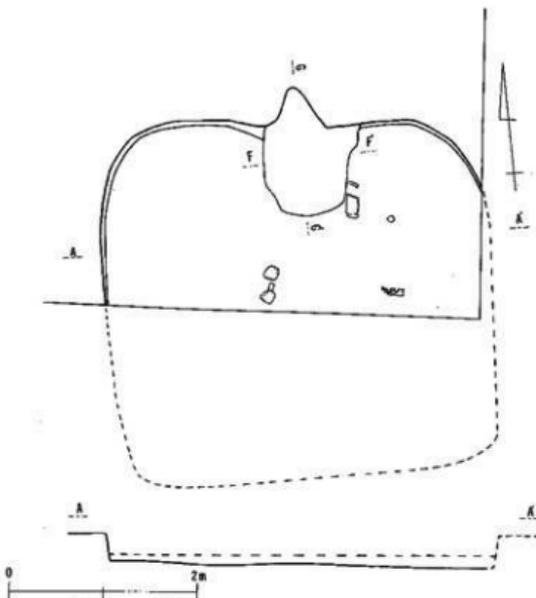


第10図 4号住居址カマド (1/30)

り下げによってとぼしてしまつた(断面図破線は床面推定ライン)。柱穴・周溝はない。カマドは北壁中央部分に構築され、長さ1.2m幅90cm程の規模で、袖に石を用いてあつた。

〔遺物〕(第12図)

発掘部分の少ないわりには資料が得られた。甕はほとんどがカマド内部から出土しており、ほかは埋没土中からのものである。9の甕は、カマドから出土しているが、形態から武蔵型の甕の可能性が高く、当該地域では希である。

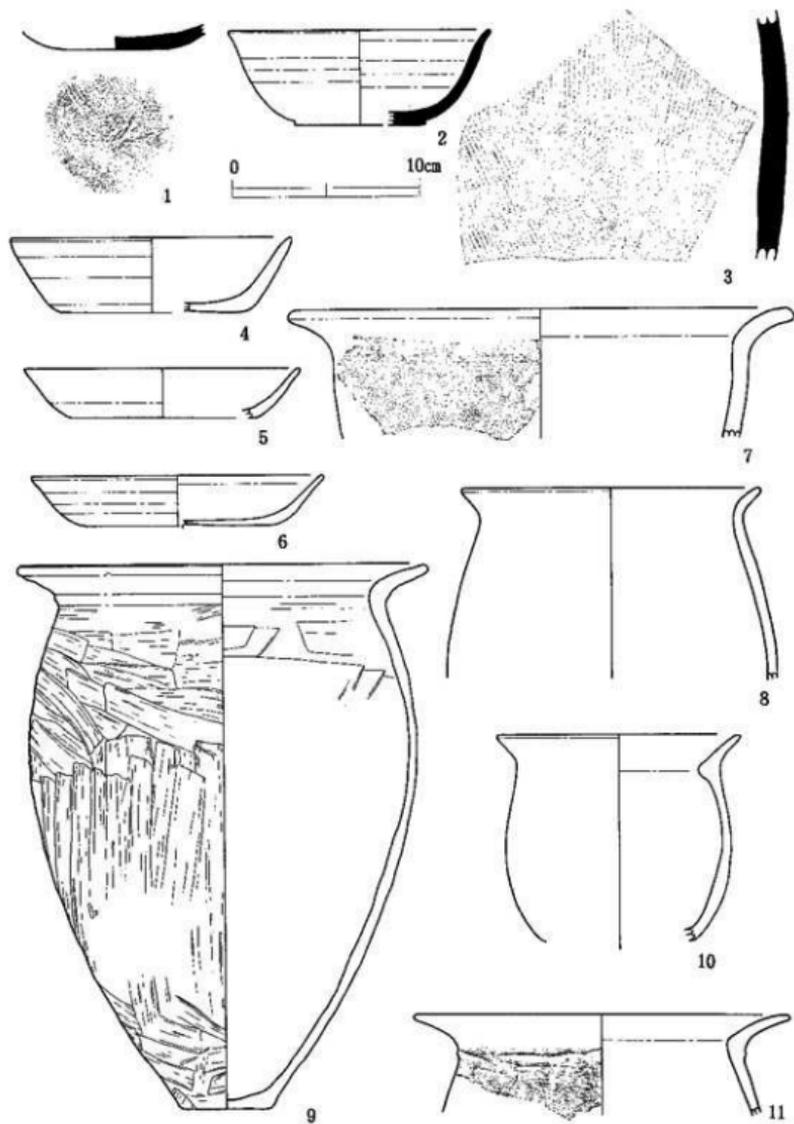


第11図 4号住居址平・断面図 (1/6)

出土遺物一覧

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量			胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	須臾器	坏	-	-	5.6	粗い黒色砂粒 細かい白色、 雲母粒子を含む	灰白色	底部へら削り 底部破片
2	須臾器	坏	5.1,	13.8,	6.8	白・黒色粒子 を含む	灰白色 灰黄色	ロクロ水挽き 底部へら削り? 磨滅により不鮮明 2/5残
3	須臾器	甕	-	-	-	砂粒を含む	灰白色	外面叩目あり 破片
4	土師器	坏	4	15.0,	-	白色粒子を含む	にぶい橙色 にぶい赤褐色	ロクロ水挽き 1/8残
5	土師器	盤状 坏	2.6,	14.6,	9.8	密 赤色微粒子を 含む	にぶい橙色	ロクロ水挽き 底部へら削り 破片
6	土師器	盤状 坏	2.7,	15.4,	9.8	密 赤色微粒子を 含む	にぶい橙色	ロクロ水挽き 底部へら削り 2/5残
7	土師器	甕	-	26.0,	-	粗い赤・白色 粒子と砂粒を 含む	明赤褐色 にぶい赤褐色	器面は横溝で 外面胴部に刷毛目痕 口縁部破片
8	土師器	甕	-	15.6,	-	金雲母 砂粒を含む	にぶい黄褐色	器面は丁寧な造りで磨きにより仕上げられているが磨滅により不鮮明 口縁部～胴部破片
9	土師器	甕	29.1,	21.8,	4.8	砂粒を含む	浅黄褐色 一部黒変	口縁部一横溝で 胴部一外面へら削り、内面へら削り乃至撫で。 底部へら削り 1/5欠損



第12图 4号住居址出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
10	土師器	小型鉢	-, 12.6, -	白色粒子 金雲母を含む	不ふい橙色 微色	口縁部一横撫で 外面一削り 内面一撫で 2/3残
11	土師器	壺	-, 19.5, -	細かい砂粒を 含む	不ふい黄褐色 不ふい橙色	口縁部一横撫で 外面一胴部へう削り 口縁部破片

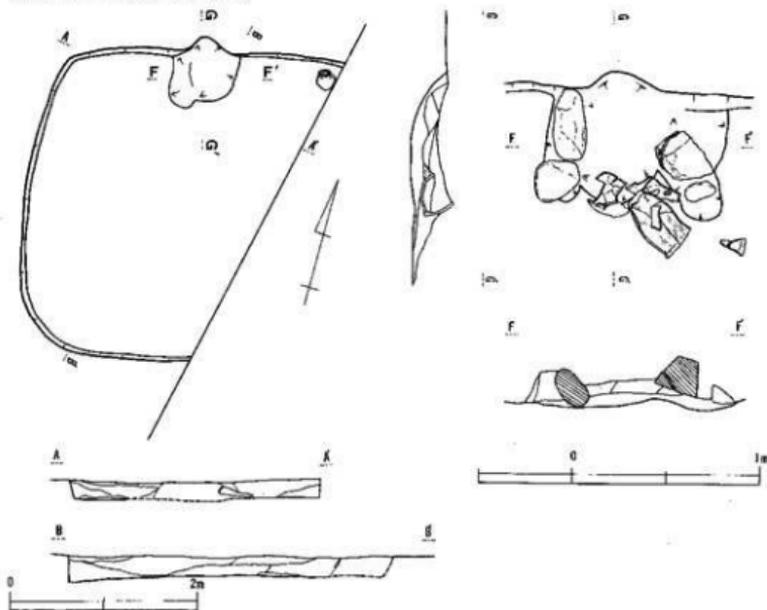
< 5号住居址 >

〔遺構〕(第13図)

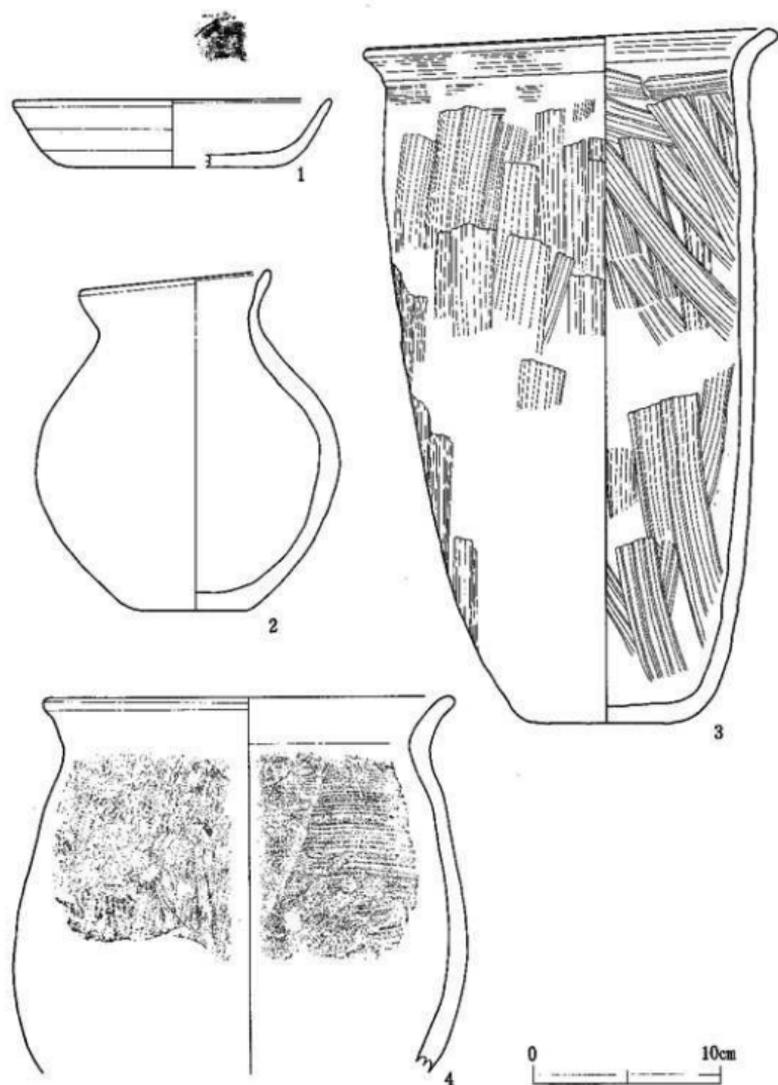
調査区域中央南東側に位置する。東側は調査区域外により発掘できなかった。平面形は隅円方形を呈すると思われるが、定かではない。埋没土は暗褐色土・砂質土等が堆積していた。規模は南北で約3.3mを測る。壁はやや外傾しながら立ち上がる。壁高は20cm前後を測る。床面はほぼ平坦。柱穴・周溝はない。カマドは北壁中央に構築される。遺存状態が悪く崩れているが、規模は長さ1.1m、幅1m程と思われる。袖は石を芯にして粘土をまわりに張り付けたつくりとなっている。

〔遺物〕(第14図)

遺物の出土は多くない。北東隅の床面直上にはほぼ完形の壺形土器が出土した。カマド内部からは壺が潰れた状態で出土した。



第13図 5号住居址平・断面図(1/60) カマド(1/30)



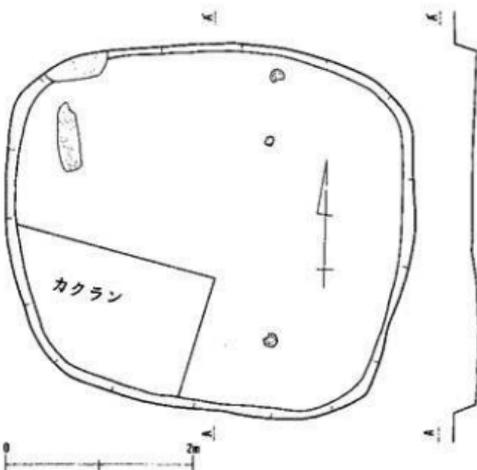
第14図 5号住居址出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色調 (内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	土師器	坏	3.7, 1.7, -		微砂粒 白色・赤色粒 子を含む	褐色	ロクロ水挽き 底部回転糸切り後へラ削り 1/4残
2	土師器	壺	17.7, 10.0, 5.8		砂粒 雲母を含む	にぶい赤褐色	ほぼ完形
3	土師器	壺	37.0, 22.0, 7.0		砂粒を含む	茶褐色	内面—縦刷毛目 外面—縦刷毛目
4	土師器	壺	-, 21.0, -		白色粒子を含 む	浅黄褐色に ぶい褐色	口縁部—横撫で 内面—刷毛目 1/3残

<6号住居址>

〔遺 構〕(第15図)

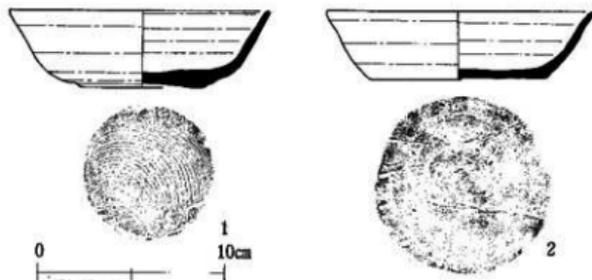
調査区域中央南側に位置する。南西側は試掘用立て坑によりカクランを受けている。規模は東西約4.4m、南北約4mを測る。平面形は不整の方形を呈する。壁は外傾しながら立ち上がる。壁高は25cm前後を測る。柱穴・周溝はない。カマドとしての遺構は検出されなかったが、北西隅の壁と床面の2カ所に焼土が認められた。



〔遺 物〕(第16図)

遺物の出土は少ない。須恵器
坏が2点出土している。

第15図 6号住居址平・断面図 (1/60)



第16図 6号住居址出土遺物 (1/3)

出土遺物一覧

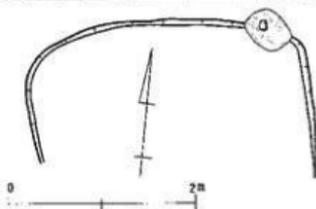
(単位 cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面/外面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	須恵器	坏	4.2, 13.8, 6.6		細かい白・黒色粒子を含む	褐灰色 灰色	ロクロ水挽き 底部一回転糸切り痕 口縁一部欠損
2	須恵器	坏	3.7, 14.1, 9.4		細かい白・黒色粒子を含む	灰白色	ロクロ水挽き 底部へう削り、刻書あり? 口縁一部欠損

<7号住居址>

〔遺構・遺物〕(第17図)

調査区域中央部分に位置する。削平等により遺存状態の極めて悪い竪穴となっている。南半分は消滅。規模は遺存部分の東西で約3mを測る。北東隅に焼土のまとまりが検出されており、カマドがあったと思われる。遺物は破片のみで数量も極僅かであった。

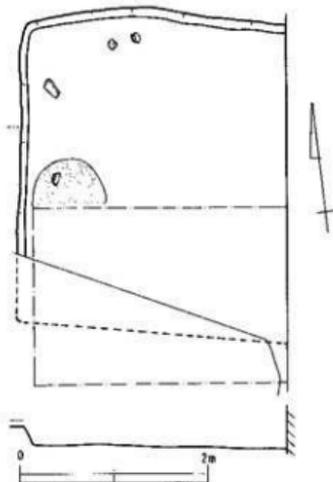


第17図 7号住居址平面図(1/60)

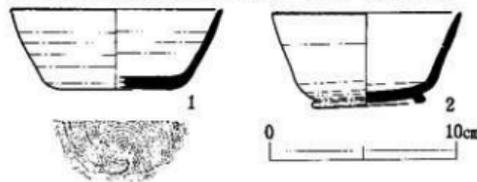
<8号住居址>

〔遺構〕(第18図)

調査区域南東側に位置する。東側は調査区域外により完掘できなかった。また南半部は試掘用立て坑及び9号住居址により不鮮明となっている(破線部分は推定ライン)。平面形は方形を呈すると思われ、規模は南北3.4m程と思われるが定かではない。壁は外傾し立ち上がり、高さ20cm前後を測る。床面は平坦。柱穴・周溝はない。南西側に焼土が確認されたが、カマドの跡であろうか。



第18図 8号住居址平・断面図(1/60)



第19図 8号住居址出土遺物 (1/3)

〔遺物〕(第19図)

遺物の出土は良好でなく、少なかった。

出土遺物一覧

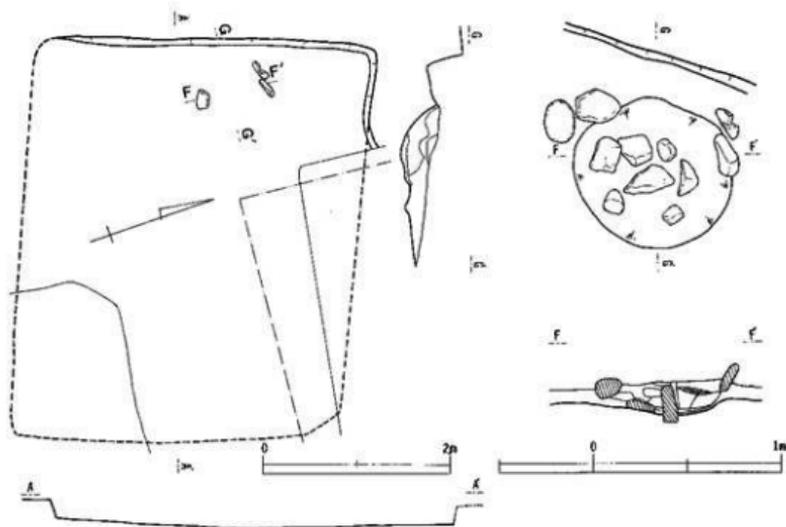
(単位 cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面/外面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	須恵器	坏	4.3, 11.2, 6.0		微砂粒を含む	灰色	ロクロ水挽き 底部一回転糸切り痕 2/5残
2	須恵器	高台付坏	5.1, 10.0, 5.4		微砂粒を含む	灰白色	ロクロ水挽き 付高台 口縁部欠損

<9号住居址>

〔遺構〕(第20図)

調査区域南東側に位置する。北東側は試掘用立て坑及び8号住居址により、南側は削平と10号住居址により不鮮明となっている(破線部分は推定ライン)。本住居址を含め8号住居址あたりから南側は、洪水による攪乱によるものか埋没土及び地山に砂礫土が多くなり、壁の壁は非常に解りにくく不明瞭であり、かろうじて床面が確認される程度であった。平面形並びに規模は不詳である。残存している西壁は、外傾しながら立ち上がり、高さは20cm前後を測る。床面は平坦であるが、遺存部分は少ない。柱穴・周溝はない。カマドは西壁に石を用いて構築されていたと思われるが、遺存状態は悪かった。



第20図 9号住居址平・断面図(1/60) カマド(1/3)

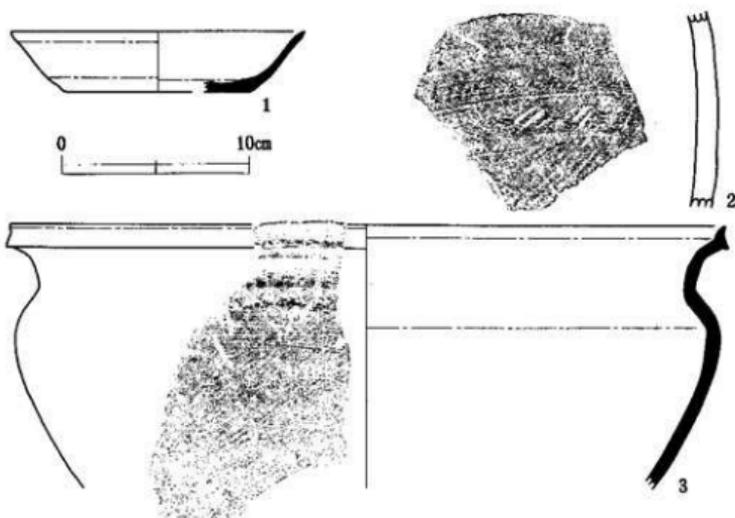
〔遺物〕(第21図)

遺物の出土は少ない。

出土遺物一覧

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面/外面)	整形・特徴・その他	
			器高	口径・底径				
1	須恵器	坏	3.25, 15.6,	9.8	微砂粒を含む	灰色系	ロクロ水挽き 底部へへら削り 破片	
2	土師器	甕	-	-	砂粒を含む	褪赤褐色	外面へ叩き目痕あり 破片	
3	須恵器	甕	-	38.0,	-	砂粒を含む	灰色	口縁部横撫で 外面へ叩き目痕あり 整形 破片

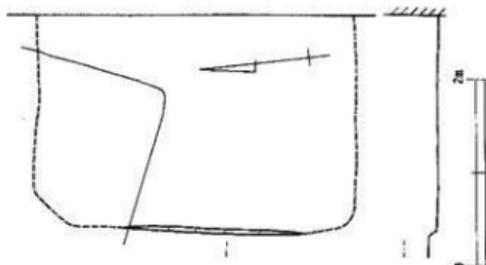


第21図 9号住居址出土遺物 (1/3)

<10号住居址>

〔遺構・遺物〕(第22図)

調査区域南東端に位置する。東側は調査区域外により完掘できなかつた。西壁の一部と床面が若干検出されたのみであり、詳細は不明である。遺物は土器の破片が極僅かに出土している。

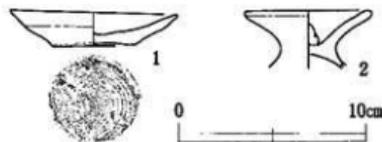


第22図 10号住居址平・断面図 (1/60)

<遺構外>

〔遺物〕(第23図)

住居址のほかには遺構は検出されなかつたが、排土作業中に中世の遺物が出土したので紹介しておく。



第23図 遺構外出土遺物 (1/3)

出土遺物一覧(単位 cm)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
1	土師質	皿	1.9,	8.8, 4.3	砂粒、金雲母を含む	灰黄褐色	ロクロ水挽き 底部一回転糸切り痕 略光形
2	土師質	?	-	6.6, -	微砂粒を含む	赤褐色	外面は磨かれ丹彩される 1/3残

V ま と め

調査の結果発見された遺構と遺物は、IVでみてきたように竪穴住居址が10軒確認され、弥生時代及び奈良・平安時代、中世の土器・石器が採集された。弥生時代の3号住居址に関する成果等は、『丘陵』第12号に呈示しておいたのでそちらを参照して頂くこととし、他について気が付いたところを述べまとめとしておこう。

出土した遺物は、土師器・須恵器の環・甕が多く、8世紀代の所産と思われる盤状の環が4・5号住居址から出土している。4号住居址カマド出土の甕（第12図9）は外面胴部を篋削りする特徴的なもので、その系譜等が問題となつてこよう。6号住居址の須恵器環は、底部を篋削りするものと回転糸切り無調整のものがあり、時期的に差が出てしまう。8号住居址から出土した須恵器高台付環は、小振りの身の深いもので、本遺跡周辺ではこれまでに同様な形態の環は知られておらず特徴的なものであろう。底部に糸切り痕のある須恵器環が共伴しており、平安時代に比定できるものであろうか。各住居址は出土遺物により、1・2・4・5・9号住居址が奈良時代、8号住居址が平安時代、6・7・10号住居址は不詳としておく。

本遺跡では住居址の平面形はほぼ隅円方形を呈し、北側にカマドを構築する例が主体となっているが、9号住居址のように西側につくられるものもある。藤井平においてこれまでに発掘調査された奈良・平安時代の遺跡は、東側にカマドをもつものが主体を占め時代的には甲斐型環を伴う平安時代が中心となっていた。本遺跡の住居址はこれらよりも古く位置付けられ、遺跡の性格を考える上で重要であろう。

お わ り に

今回の調査によって、当該地域にはあまり類例のない8世紀代の集落がかつて存在していたことが理解されるに至った。出土遺物の量はそれほど多くはないが、各々に特徴をもった環・甕がみられ今後の研究に資すること大であろう。弥生時代は東側に所在した下横屋遺跡との関連で捉える必要があろう。

開発によって破壊される遺跡は数多いが、地中に埋没された先史・古代の遺跡は、文献には残らなかった過去の人々の生活・文化を我々の眼前にあらわしてくれる貴重な文化財である。埋蔵文化財を保護し後世に伝えていくことは容易なことではなく、一度調査された遺跡はもう二度とは元に戻らない。それだけに発掘調査は重要視されそれに拘る我々の責任は重大なものがある。関係各位の御理解・御協力・御指導・御助言を賜い、今後とも文化財保護に尽力していくものである。

文 献

- 山下孝司・榎本勝 「北下条遺跡略報―備描文を有する弥生土器―」（『丘陵』第12号 1986. 4
甲斐丘陵考古学研究会）
藤崎市教育委員会・藤崎市遺跡調査会 『下横屋遺跡』 1991. 3

写 真 图 版



遺跡遠景 (矢印の下)



遺跡近景

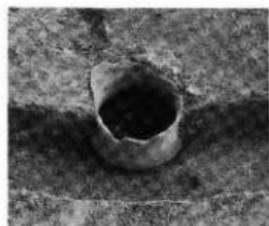


1号住居址と出土遺物



2号住居址と出土遺物

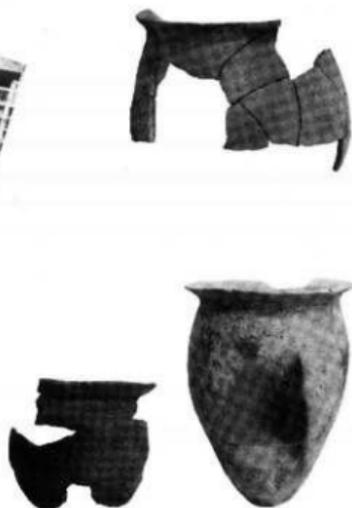
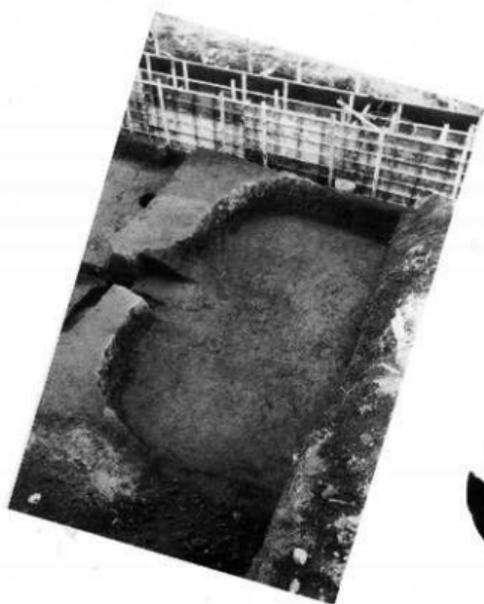




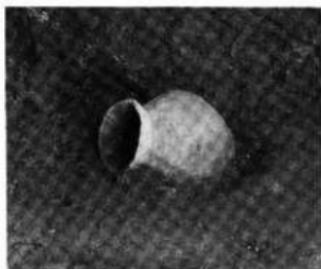
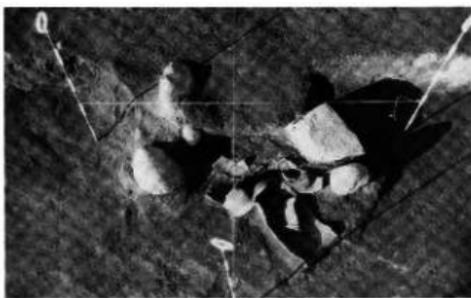
炉



3号住居址と出土遺物



4号住居址と出土遺物

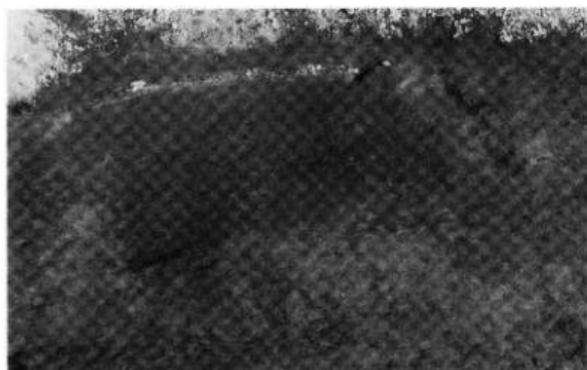


5号住居址と出土遺物



6号住居址と出土遺物

7号住居址



発掘風景



8・9・10号住居址



8号住居址出土遺物



9号住居址出土遺物



遺構外出土遺物

きたげじょう
北下条遺跡

発行日 平成3年5月31日

発行 蕪崎市教育委員会
〒407 山梨県蕪崎市水神一丁目3-1
TEL 0551-22-1111代

印刷 アートプリント社

